

盛の子正信に至つては其邸内にすら祠堂を建てたと云ふ事である。

附記

宗吾の義擧を正盛の代ではなくて正信の代とした者もある、然し正盛の方が本當だと學者が云ふ、傳説其他によれば、宗吾は既に正保二年十二月十八日出府し時の老中久世大和守に籠駕訴を試みたが却下されたので、同月二十二日將軍家光、上野寛永寺參詣の歸途三枚橋に於て訴狀を差出したとある、又本編中正盛に訴へたとき正盛は事面倒と

ばかり馬に鞭を當て一散に、邸内へ馳け込んで、跡で宗吾は從士に捕へられ辻番所へ曳かれたとも云ふ、だが將軍家の先驅にあるものがそんな輕擧が出来たらうか怪しい。

宗吾の刑死に就ても諸説がある、宗吾の長男惣平(十八歳)のみ宗吾と共に斬られた、宗吾江戸への發足の時衰弱して居て、其上大雪降りであつたがため、惣平は途中まで父を勞りながら歩いたのが死罪の原因であるとも云ふ、宗吾は佐倉在官の下役人共

から非常に憎惡せられて居たので、宗吾の居村である公津臺まで曳かれ行くに及ばず途中で殺された相だ、勿論佐倉の住民一同は助命を願ふたが遂に許されなかつた、そして宗吾のみならず長子まで斬るに及んで百姓共は非常に憤慨し其横暴を鳴らした、全く此場合罪もない子供まで斬るとは當時の苛酷を以てするも當然だと云へない、一説には長子のみならず其妻及び長男宗平、次男源之助、三男三之助、四男喜十郎の五名を刑した

而も子供から前にやつて親共に見せつけたとも云ふ。

堀田では當時の領主正盛其子正信共、三代四代の將軍のために殉死した。殊に正信の死は悲慘を極めたもので其年は宗吾と同年四十九歳であつた相だ、二代までも殉死は幸福ではなかつた、此處に於て宗吾の幽魂が出るとの噂が立つた、人間靈あらば、斯る暴虐壓政下に死んだ宗吾も其偉靈を現したかも知れない、宗吾死後の佐倉領民は非常に幸福であつた。

宗吾と共に在つた忠藏、三郎兵衛、半十郎、六郎兵衛、重右衛門は處拂ひ追放の處分を受けたので坊主となつて宗吾の冥福を弔ひつゝ、後高野山に移つたと云ふ、今宗吾の社の傍に五人堂と云つて此五人を祭つてある相な。

又宗吾は直訴前幾度も、佐倉江戸間を往復した、そして其度毎に佐倉の駕籠屋某、及び當時江戸の俠客にして、宗吾の犠牲心に感じた井筒屋五郎兵衛が、身内のものを引連れ、命に懸けて宗吾を守護した、或時は下役

人の追撃に逢ひ、防戦甚だ困難を感じたとき、附近の百姓共、武器を掲げて馳せ來り、五郎兵衛を助けたともある、弱きを助け強きを挫き、義に勇めば十三萬石の領主にも衝突かうとする當時仁俠の俠客としては斯くの如き事も仕たに違いない。

終りに甚兵衛渡しは、今に残る彼は喜右衛門を殺した後、首を釣つて死んだとも云ひ、又印磨沼に深く身を沈めたとも云ふ、兎に角彼は死を以て報いた其偉烈敢て宗吾に譲るべくもない。